

さりげないスナップ写真のすてきな笑顔のように  
群馬の教育や文化の話題を普段着のまま紹介するシリーズ



## 外国人の子どもの就学をめぐるって

「外国人の子供の保護者については、学校教育法第 16 条等による就学義務は課されておらず、学校教育法施行令第 1 条に規定する学齢簿の編製については、外国人の子供は対象とならないものの、外国人の子供についても、就学の機会を確保する観点から、教育委員会においては、住民基本台帳等に基づいて学齢簿に準じるものを作成するなどして、就学に関する適切な情報の管理に努めること。」

これは文部科学省が地方自治体にあてた通知「外国人の子供の就学の促進及び就学状況の把握等について」の一部です。憲法や教育基本法では「国民」でない外国人はその子どもに義務教育を受けさせる義務はないことを前置きしながら、国際規約や子どもの権利条約に批准していることを念頭に就学を保証する姿勢を示しています。

今回、私たちは伊勢崎市内で外国人の子どもに日本語教育を行っている「子ども日本語教室・未来塾」（以下「未来塾」）を訪問し、スタッフのみなさんの献身的な姿勢、財政難の打開策、子どもたちの就学をめぐる障害、教室を巣立っていく子どもたちの姿取材しました。

## 子ども日本語教室・未来塾は平成 23（2011）年にスタート

外国につながるのある子どもたちを支援するためにボランティア教室が立ち上がりました。代表は高橋真知子さん。やがて伊勢崎市や共同募金会、企業などから助成を受けて活動するようになりました。平成 28（2016）年度からは伊勢崎市教育委員会から委託を受けて小中学校に在籍する外国籍児童生徒対象の土曜クラスでの指導を担当することになりました。ボランティアの皆さんは元教員や塾経営者、会社員などさまざまなバックグラウンドを持ちながら、日本語だけでなく算数・数学、社会、理科、英語指導について学校教育とは別の角度からその指導法にアプローチし、1対1あるいは1対2の態勢を基本に置いて指導しています。時には子どもたちの悩みに耳を傾け、その情報を共有しながら最善の支援方法を追求してきたプロフェッショナル集団と言えます。

## 会場は緋の郷

未来塾は伊勢崎市内2か所の教室で支援活動を行っています。ひろせ教室と緋の郷教室です。7月6日土曜日午後1時半、私たち4名の取材班は昭和町にある市民活動支援施設緋の郷を訪問しました。

私たちを迎えてくれた高橋代表は、「何人の子どもが集まるかはその時になってみないとわかりません」と言います。日本語の勉強の必要性はよく認識しているけれど市内各地からやってくる子どもたちにとっては必ずしも通いやすいところではないのです。しかしやがてその心配を消し去るように小学生、中学生が集まってきました。中には大学生もいました。



## 卒業した生徒が指導する立場に

早々に到着した**A**君は未来塾から大学進学した日系ブラジル人。就労のために来日した親と一緒に日本とブラジルを行ったりきたりしてきた。日本語をいっどこでおぼえたか記憶が定かでないというのが私たちとの日本語での会話に不自由はない。高校は太田市内のブラジル人学校を卒業した。大学はA0で入学。今日はプログラミングの宿題をもってきたがもちろん先生に教えてもらうわけではない。すぐに日本語が苦手な女生徒の指導に入った。子どもたちの母語はポルトガル語、スペイン語、タガログ語、ウルドゥ語、中国語などさまざま。**A**君は教室にとってはとても助かる存在。やってくる子どもにとって母語が通じる環境はなによりも安心の材料だから。卒業生のこのような姿を見ると教育の理想の形に接した気がしました。

## 取材陣もいつの間にか先生に！

この日、スタッフが予想していたよりも多くの子どもたちが集まってきました。するとまるで相談してあったかのように齋藤理一郎、白石ひろみ、朴順子の取材陣も子どもと向き合うことになりました。その様子には何の不自然さも感じられませんでした。写真撮影担当の倉林だけが一抹の不安を抱きながらカメラを構え続けました。「だれが記事を書くのだろう？」



## 白石、朴は双子姉妹担当

兄に伴われて到着した**B**ちゃんと**C**ちゃんは小学校1年生のアルゼンチン人双子姉妹。ふたりとも日本語の教科書をもってきました。最初は不安そうな表情を見せていましたが次第に臨時の先生との距離を詰めてまるで「家族」のようでした。



**C**ちゃんは「てにをは」のうちの「を」と「は」の勉強をしました。指導した朴さん自身も幼い頃、どのように教えてもらったか覚えていないので、間違ったら正解を伝えるだけだったとのこと。子どもたちの素直さに助けられたけれど、片言のスペイン語でも話せたらもう少し楽しく過ごせたらうにと振り返っていました。

## 中学就学の機会を失った

冒頭で触れたとおり、国は外国人の子どもに義務教育の機会を与えることに否定的ではないが、実際にその是非の判断をくださる地方自治体の姿勢はさまざまで、日本語能力や年齢を理由に受け入れをためらうケースが少なくないようです。

音声教材を使用して勉強していた**D**君は、途中から中学校で勉強し始めましたが、「体験入学」であると告げられて卒業を認めてもらえませんでした。未来塾と連携するNPO法人Gコミュニティの担当者が当該の教育委員会と協議しましたが結論は変わらず、今後は夜間中学のある市に引っ越すとか下学年に編入させてくれる中学を探すなどして、高校進学への道を探します。



## パキスタン→中国→日本の旅の末に

パキスタン国籍の**E**さんは5年前に両親、姉、兄とともに政情不安の故国を離れて難民として中国に移住し、その後日本にやってきました。母国語はウルドゥ語ですが公用語である英語も日常的に使っていたので中学での英語は問題ない。今、中学2年。日本語もめきめきと上達して、多くの外国人が苦手とする社会や理科のテストでも平均を上回る得点を取ります。80点をとった社会の答案を見せてもらいました。「尖閣諸島」「田沼意次」「公事方御定書」の漢字は完璧。記述式も「百姓一揆と打ちこわしはききんのときに増えている」と立派に答えている。家庭での日本語教育がしっかりしているのだろうかと聞いてみたら「両親は日本語をまったく話せません」とのこと。しかし19歳の姉**F**さんの努力の話を聞いた時に、過酷な運命の中で希望を失うことなく夢を追い続ける姉の姿が**E**さんの目標になっていることを理解しました。



## 「日本で高校生になった難民少女」

苦労の末に昨年、県内の高校に入学した**E**さんの姉**F**さんは秋に開催された明石杯英語スピーチコンテストに出場して準優勝に輝きましたがこの欄の見出しがその時のタイトルです。彼女のこれまでの成功を支援したのが未来塾のスタッフのみなさんでした。スピーチの英語原稿を見せていただいた私は**F**さんと連絡を取り、育ちと学びへの掲載を了解してもらいました。一部を日本語に訳して紹介しましょう。

◆14歳の時に中国に行きました。中国では外国人は公立学校に入れません。私立学校はお金がかかります。叔父から、日本では外国人でも学校に入ると聞いて日本に行くことにしました。

◆15歳の誕生日を6ヶ月過ぎた時に伊勢崎市の教育委員会に行ってルールを知りました。中学校に入学するには15歳未満でなければならないと。中学校に入れなければどうやって勉強するのでしょうか。その時ある人が私に勉強ができる方法を教えてくれました。猛勉強が必要だけれど。そこで私は袖をまくり上げて高校生になることを目標に勉強しました。

その時わたしは片言の日本語も話せませんでした。数日、日本語を勉強した時、先生が未来塾のことを話してくれました。私たちは難民ビザを申請していたので両親は6ヶ月間は働けません。お金のかかる学校には行けなかったのです。未来塾で私たちの状況を説明したところスタッフはボランティアとして私を助けてくれました。でも外国人の私にとって日本語を学ぶことはとても難しい。特に漢字は大変でした。た

くさんあるし一つの言葉が違った意味を持つ。  
◆未来塾のスタッフは言いました。9年間の義務教育を終えていない私は中学卒業認定試験をパスしなければ高校受験ができないと。2016年10月に受験するまでの5か月間で猛勉強しなければなりません。結果は英語、数学、社会をパスしましたが勉強不足で社会と国語は落ちました。とてもがっかりしましたが、翌年10月に2回目の試験を受けてパスしました。そして高校入試に合格して今ここにいます。  
◆この困難な時に私は挫折する瞬間が何度もありました。希望を失いました。でも両親や兄弟

は私を励まし続けてくれました。その結果私は気力を振り絞り目標を達成することが出来ました。私の経験が希望を失い、夢を諦めそうになった人たちへの励ましになればと思います。  
◆最後に私のモットーを。「永遠に生きるつもりで夢を抱け！明日死ぬつもりで生きよ！」

未来塾の活動がFさんの夢を支え、あとを追う人たちの未来を支えていることが実感できるスピーチではありませんか。私は思わず目頭をおさえました。悲しいからではありません。

## 今後、さらに増えていくニーズに全県的な援助が必須

齋藤理一郎(群馬県立太田フレックス高等学校)

7月6日(土)の午後に、伊勢崎の市民交流館「緋の郷」を会場にした「子ども日本語教室・未来塾」の見学に行ってきました。訪問時、会場には外国につながる子どもたち・・・大学生と高校生を含めて3名がいました。「市内在住の小中学生の日本語支援」の活動と聞いていたので、大学生や高校生もいるのを、ちょっと不思議に思いましたが、聞くと、「未来塾を卒業した生徒が、高校の授業について行けるように補習に来ている」とのことでした。大学生については、日本語と母語が通じるので、「自分は先生？いや、生徒です」という反応。チューターみたいな役割なののでしょうか。学んだ者が教える側になって戻ってくるのは「未来塾」という名のモデルケースに見えました。

午後の部スタートの時間になると、子どもたちが三々五々やってきました。中学生クラスの時間だということですが、中学生が、小学生の弟や妹を連れてきたり、部活の関係でしょうか、高校生も集まってきました。それぞれが、「漢字」「算数・数学」「教科書」「英語検定」「日本語検定」「音読・読み聞かせ」などの教材を持っていて、ボランティア支援の先生方が、ほとんどマン・ツー・マンで対応します。最後は人手が足りなくなり、見学で行った私も高校生G君の勉



強をみることになりました。

高校生とはいっても、日本語の理解レベルは小学校低学年レベルです。まずは小学校2年生向けの物語文と一緒に読み、どういう話だったかを口頭でやり取りして、答えをノートに書かせました。1時間の国語の勉強に、G君は集中するのが疲れるのか、時々、ふだんの学校生活のことや将来の夢など雑談を交えながら、それでも2つの物語をしっかりと読み込むことができました。休憩時間をはさんで、今度は算数の勉強です。前回の続きの「割り算」から。難しい計算は計算機を使ったり、繰り下がりの引き算は定規で「双六」したりしながら、正解を導いていきました。「分からない。やりたくない」と言っていた「小数の計算」も、また定規で細かい目盛りをペン先で指しながら一緒に解いていくと、最後には、「時間内に、このページの16

番の問題までやる！」と、本人が言い出しました。2時間の学習を終えたあと、「先生、来週も来てくれる？」と尋ねられたときは、学習に意欲的な**G**君と過ごせた時間に、こちらが感謝でいっぱいになりました。

「学びたい」という外国ルーツの子どもたちと、「手を差し伸べたい」という大人が集まった、「未来塾」という空間が、とても尊いものに思えました。と同時に、この活動がボランティア

に支えられている不安定さに心配を覚えました。看板に掲げる「小中学生の日本語支援」以上の活動(不就学児や高校生の学習支援、進学ガイドなど)に、「未来塾」は取り組んでいます。そこに集まる子どもたちのニーズは、今後、さらに増えていくのは間違いない。その活動に、持続的に関わる大人を確保するためには、各市町村に範囲を限らない、全県的な行政による人と財政の援助が必須であると感じました。



## 日本語教室は子どもたちの大切な居場所

朴順子

教室には国も年齢も異なる子どもたちが思い思いに集まって、ボランティアの方のサポートを受けながら学習に取り組んでいました。双子のかわいい女の子がお兄ちゃんと一緒に入ってきました。1年生とのこと。私と勉強を始めたのは**C**ちゃんです。リトルマーメイドのプリント入りの筆箱には鉛筆がきれいにそろっていて、我が家の孫にも見習ってほしいくらいです。力強く握った鉛筆で一文字一文字丁寧に名前を書きました。日本語は少し聞き取れているようですが自分から話すことはありません。(片言のスペイン語でも話せたら緊張もほぐせたのに。残念！)

まずは国語の宿題プリント(えーっ！助詞の「を」「は」「へ」を正しく選択する問題！)幼稚園や保育園の体験もなかったでしょうから自然に身につく言語知識に限界があるはず。最初の文では「お」ではなく「を」を選んだの

で(分かってるんだ！)と思ったら次は迷いながら不正解。説明もままならず、ただ答えを誘導するだけとなりました。次は算数プリントの「10より大きい数」。10本の束が四つとバラが2本、合計の数を**C**ちゃんは「14」と書きました。(そうか、10本が4つだから14と書いたのか)絵にしながら説明したもののしっくりしません。理解に多少時間がかかっても繰り返しの中で子供たちはその能力を高めていくでしょう。でも、わかる言葉で少しサポートできれば次のステップがスムーズになるはず。です。

1年生の**C**ちゃんは小さい体に大きな課題を背負って毎日頑張っているのでしょう。日本語教室はそんな子どもたちの大切な居場所。スタッフの皆さんが試行錯誤の中で運営されていることが伝わってきました。わずかな間だけ隣に座った私の胸は不甲斐なさからチクリと痛みました。

## スタッフの皆さんからお話をうかがいました

1時半から休憩をはさんで2時間の指導を終えたあと、スタッフの皆さんの話を聞くことができました。



### 財政的な課題は？

未来塾は任意団体であるために受けられる補助金は不安定です。何年続けて補助してもらえるのか、来年は打ち切られるのかといつも不安を抱えています。

半数が市外から来てくれるボランティアさんたちには謝金と交通費はお支払いしています。活動の継続性を考えると無償ではいけない。

クラウドファンディングを試みたところある程度の成果があがりました。とても助かりました。昨年、お礼のパーティーを開きました。

### 教室の確保は安定していますか？

現在は市の南部のひろせ教室とここ餅の郷の2カ所です。ひろせ教室は子どもたちの住まいが近いので通いやすいのですがスペースは狭いので1対1の指導を徹底するには不満があります。順番待ちの子どももいます。予算に限りがありますから場所も指導者も増やせません。

### 日本語指導上の課題は？

高校受験を目標に据えると5~7年の日本語指導が必要になりますが全員が8~10歳から勉強を始めるわけではない。日本語の基礎力も理解力も違う異年齢集団が同居することにならざるをえません。当然ですが一人一人に適切な指導を行います。指導者同士が緻密な情報交換を行い、効果的な指導方法を追求します。私たちはこれまでの経験を蓄積してより良い方法を築

いてきたと自負しています。それでも子どもたちの家庭環境や能力はさまざまですから課題は尽きません。

高校進学は大切な課題ですが、進学後の指導もまた大切です。高校の学習についていけないケースがあるからです。市からの委託事業は小中学生が対象ですから私たちの自主的な支援にならざるを得ません。

日本語の指導とは別に年齢の上の子どもには大人になるための、あるいは親になるための資質を育てることも大切だと感じています。

### 行政に望むことは？

市などは法令を優先させなければならないのかもしれませんが、経済的に困難を抱えている家庭への公的援助とか、就学についてのルールを柔軟に運用してほしいというのが現場の願いです。また、私たちが行っている個別の日本語指導を学校がやってくれると多くの子どもが救われます。学校によっては特別な教室を設置して外国人の子どもに日本語指導をしているところもありますが十分とは言えない状況です。一番効果的なのは夜間中学校の設置ではないかと思えます。年齢制限等の理由で就学できなかったFさんやD君のような子どもも救われるのですから真剣に考えてもらいたいと思います。



### 取材を終えて

スタッフの皆さんには指導終了後もお話を聞かせていただきありがとうございました。

子どもの人権を尊重し、教育を受ける権利を保障したいという熱い思いが読者に伝わることを願っています。 《撮影・文責：倉林順一》